

このまちで ともに 歩んでいく

実践事例集
vol.5



協同労働が
つくる
地域のかたち



若者が集まりカフェを立ち上げ

仲間とともに成長し続ける

地域共生型就労拠点こみっとプレイス（NPO法人ワーカーズコープ）

◆事業内容：カフェ・菓子製造（就労継続支援 B 型）

◆所在地：東京都豊島区

2018 年 4 月にせたがや若者サポートステーションの元利用者を中心に立ち上げ。就労継続支援 B 型事業所として、カフェ運営（「こみ Café」）、菓子製造を軸に、自家焙煎コーヒー・自主製品の販売なども。「得意を活かす」が、コンセプト。

悩みながらも一歩ずつ

（所長 東山由花）

2016 年 10 月、誰もが働ける場をと、私たちは立ち上げに向けて活動し始めました。ワーカーズコープの全国本部（東京・池袋）と東京中央事業本部の組合員の呼びかけで集まったのが、せたがや若者サポートステーション（ワーカーズが実施）に通う若者たちでした。彼らにはカフェでのジョブトレーニングの経験があり、「一緒にカフェをつくりたい」「自分たちと同じように悩む人たちの居場所と働く場をつくりたい」という思いがありました。私は立ち上げのための第一回目の懇談会に参加し、一緒につくりたいと思い、立ち上げのメンバーに加わりました。そして、まずは地域サロンや出張カフェという形で活動を始めました。

今、4 人の若者が組合員となり、働いています。

立ち上げ後も、話し合いを大切にして一步一步前に進んでいます。事業所の会議では、経営や事業所の目標について振り返りながら、個々の悩みを打ち明け合うこともあります。

それぞれが「成長していこう」「今は自信がないけどこれから自信をつけていきたい」と、自分からお菓子作りや料理の練習をしたり、苦手なことにチャレンジして一つひとつできることを増やしています。悩みながらもがんばる姿に、私のほうが元気をもらいます。自分と向き合いながらも、少しずつ周りへ目を向け、こみっとプレイスのために、こみっとプレイスに訪れる人のために、という思いが高まっていることを全員から感じる日々です。



↑開所式の日。メンバーで集まって



↑こみっとプレイスで行っている
毎月のサロンには地域の人が、
物作りの様子

近隣住人や近くの会社で働く人たちなど、少しずつ足を運んでくれる人が増えています。チラシを知人に配ってくれたり、貸し切り予約をしてくれるなどの形で協力してくれて、毎月のサロン（物作り、囲碁・将棋など）も、参加者が少しずつ増えてきました。最近では、地域の人から新しいイベントをやりたいという声が上がリ、計画を立てているところです。

とはいえ、日々の業務に追われてまだまだ話し合いは足りないですし、利用者が少なく赤字であり、事業所としての課題は多い。それでも、これからも成長し続

け、前に進み続けられると思っています。ぜひ見守り、応援してほしいです。

人の心に寄り添うごはんを

(佐藤健太)

「おいしくて体によいごはん」を作りたいと思い、大学で栄養学を専攻し、卒業後は「もっと料理の勉強をしたい」と、調理の専門学校に進学しました。

高校生の頃までは偏食で、ごはんを食べることにあまり興味がなかったけれど、食のさまざまな栄養や働きが健康の役に立っているということを知り、「もっと勉強してみたいな」と思ったのを覚えています。またその頃、お店でおいしい料理を食べたことで、「調理の仕方でおいしさが変わる」ことを学び、「おいしくて体によいごはん」を目指すようになりました。

高校、大学は卒業することができましたが、専門学校では体調を崩し、中退しました。もともと、人と接することが苦手。集団生活が怖くて、高校の終わり頃から休みがちでした。専門学校を中退してからは、病院に通い療養をしつつ、働いたり辞めたりを繰り返してきました。言葉の裏を探ったり、「人に嫌われないか」という気持ちがとても強くなっていたように思います。

ずっと働くことが怖くて、上手いかず悩んでいたため、せたがや若者サポートステーションに通い始めました。就労体験として、出張カフェのプログラムに参加するうちに、同じように働くことに悩んでいる仲間と出会いました。お互いの辛い経験や気持ちを話すうちに、一人じゃないという安心感も湧いてきたように思います。

それ以外にも、学生の頃に会った友人が卒業後も変わらずに仲良くしてくれて、「お茶しよう」「おいしいものを食べに行こう」と誘ってくれたり、栄養士が運営する食堂カフェでアルバイトをしていた時にはお客様が差し入れてくださったこともあります。

そんな風に、自分は一人じゃないとすることができ、周りの方々がたくさんの優しさをくださったおかげで、少しずつ人と接することが好きになりました。不規則だった食事も暮らしも整っていく。人とかかわること悩んでいたけれど、一方で、たくさんの方々の心遣いのおかげで心も体も元気になったと思います。

振り返ってみると、「次は違う人生がいいな」と思っていますが、同時に生まれた「ほかの人が、人と接

⇨地域のお祭りに出店。左が東山さん



⇨お菓子作りの様子。右が佐藤さん

することで苦しんでほしくない」という思いは、これまでの「おいしくて体によいごはん」を作りたいという思いに加わりました。これが、こみっとプレイスに参加している理由です。

こみっとプレイスで働き始めてみると、家族のような仲間がいる安心感からか、これまで働いてきた職場とは違った感覚があります。これまでだったらすぐに挫けていたけれど、辛いことがあっても乗り越えられるのは、尊敬も信頼もする仲間が職場にいるおかげです。ほかの誰にも代わりはできない、そう思える仲間を大切にしながら、仲間とともに生きていたい。ずっと人に支えられ生かされてきたから、今度は自分が人を支え、生かすことをしたい。

自分にできることは少ないけれど、ほんのわずかであっても、人の心と体を癒す「おいしくて体によいごはん」とともに、出会う方の心に寄り添い、「一人じゃない」と思って頂けるよう、笑顔や愛をお渡ししていきたいと思っています。



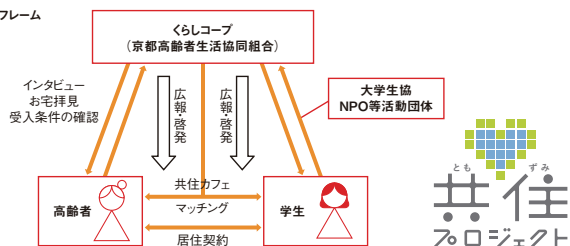
空き室を活かして 高齢者と若者がホームシェア

✓ 京都府の次世代下宿事業に挑戦

京都高齢者生活協同組合くらしコープ（以下「くらしコープ」）は、2015年5月に、組合員である建築設計士などで「住まいづくり研究会」（略称「住まい研」）を立ち上げ、高齢者が安心して住み続けられる住まいのあり方や事業化の検討を始めました。この時点では、「高齢者同士がともに住む」という発想でしたが、16年に、京都府が「大学のまち」と評される京都市で、学生の家賃負担の軽減と、高齢者や地域との交流、さらに卒業後も京都に定着することを狙って、地域創生戦略の一環として「次世代下宿『京都ソリデール』」事業を提唱したことを知りました。

住まい研では、単身や夫婦二人だけになって不安を抱えながら暮らしている高齢者にとって、世代が同じでも違っても、いろいろな人と住み合うのは魅力的な取り組みではないかと考え、くらしコープとしてこの事業を受託しました。こうしてくらしコープの「共住（ともずみ）プロジェクト」がスタートします。

●事業フレーム



✓ 顔合わせからお試し同居へ

「共住」を希望する、空き室のある一軒家に住む高齢者と若者（学生）を募集し、家賃などそれぞれが希望する条件をヒアリングし、「共住カフェ」でお茶などを飲みながら顔合わせ。そして、フィーリングが合えば「お試し」（数日間試しに同居する）などを経て、合意に達したら「暮らしのルール」をすり合わせ、借室契約を結びます。改修が必要であれば、京都府から一定の補助を受けることもできます。（これは魅力です！）

✓ 高齢者と若者のマッチング第1号

若者の情報を求めてほかの受託事業者や大学生協に「営業」をかけました。その結果、かつては3世代同居でしたが、ご夫婦だけとなり、自宅を歌声サロンや麻雀クラブなど地域のたまり場にされている組合員と、近隣県から片道1時間半かけて通学していた男子学生とのマッチングが成立。この第1号のケースが、民放テレビや新聞などで頻繁に取り上げられ、これを見た学生や父母から京都府

に問い合わせが入る。そして、その若者情報が京都府からくらしコープに提供される。という形で仲人役の仕事が増えてきました。



16年度は4組、17年度は1組、18年度は、現時点（10月）で1組が成立しています（その後、2組が新たに12月と来春から共住を始めることに）。「卒業」されたケースもありますが、現在も3組が共住中です。

今後は共住している高齢者や若者の交流の場も

✓ 課題と受け皿団体設置の提案

この事業が始まって3年。さらなる広がりとの展望と、事業を持続していくための課題もいくつか見えてきました。

一つ目は、いかにして採算性を確保するかです。くらしコープは生協ですので、成立すれば高齢者にも若者にも組合員になって頂きますが、不動産仲介業者ではないので、仲介料は取れません。また、共住が始まると、高齢者、学生さんともに、直接相手に言いづらいことをいったんくらしコープの担当者が聴いて、アドバイスや仲介をするなど、アフターフォローが必要になるケースも出てきますが、京都府からの受託費では専任の人員を配置することも、サポートのための経費などを捻出することも難しい状況です。

二つ目は、いかにして情報を収集するかです。くらしコープを含む6つの受託事業者は、事業者のそれぞれの性格から、高齢者と若者の情報の両方を常に潤沢に持っているわけではありません。（くらしコープは、若者の情報に乏しい！）

こうした課題を克服するため、京都府、受託事業者、共住されている高齢者及び若者（学生）だけでなく、企業を含む団体及び個人に参加を呼びかけ、「京都ソリデール協会（仮称）」を設置し、そこに情報を集約するとともに、資金を供与してもらう。そして、受託事業者には、マッチングなどにかかる諸経費を仕事量に応じて配分するという方策が考えられます。

異世代同居を新しい住まい方の一つとして普及していくためには、さらに事例、経験を積み重ねながら、知恵と新たな仕掛けが必要だと考えています。

（常務理事 福島広志）

※「ソリデール」はフランス語で「連帯」を意味します。2003年、フランスでは猛暑で一人暮らしの高齢者が多数亡くなりました。一方、パリなどの大都市では若者向けの住宅不足が深刻であったことから、NPO団体が中心となって異世代のホームシェアを広めたといわれています。